

にら一年一作栽培技術の確立

【背景】

県内におけるにら栽培は「二年一作」が一般的ですが、この方法では定植した1年目は株養成を行うため、収穫ができないほか、収穫期である2年目の初めは地上部を一度捨て刈りするため、その分の収穫が無駄になるといった欠点があります。

そこで、限られた農地を有効活用し最大限の収益を得るため、株養成ほ場や捨て刈りを必要としない、「一年一作」栽培技術の確立に向け、育苗期間（60日、90日、120日）・播種粒数（2粒、4粒）の検討を行いました。

【結果】

育苗期間や播種粒数で育苗した苗は、令和6（2024）年6月6日に定植しました。収穫は、9月10日に1回目、それ以降、翌年の3月24日までに計6回行いました。

育苗期間別の可販収量・粗収益は、「育苗期間90日」が最も多くなりました（表1、2）。他の試験区で収量が低かった主な要因としては、育苗期間60日では株の充実が不十分であったため、120日では大苗定植で抽だいが多く発生して株が消耗したためと考えられます。

次に、可販収量・粗収益が最も優れた「育苗期間90日」で、播種粒数の検討を行ったところ、「4粒播種」は茎数が多く株重が大きいため、品質ではやや劣るものの、規格別収量×規格別単価により計算した粗収益は最も多くなりました（図1、2、3）。

以上の結果から、一年一作栽培体系において、6月に定植を行う作型では、「育苗期間90日・4粒播種」の条件で高い収益が得られることが示されました。

表1 育苗期間別の可販収量（kg/10a）

育苗期間	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	計
60日	447(0.1)	758	656	718	880	1,053	4,511
90日	571(0.6)	894	743	797	895	1,110	5,010
120日	553(1.2)	909	742	777	864	1,134	4,979

注1 いずれも2粒播種。表2も同様。

注2 1回目：9/10、2回目：10/15、3回目：11/20、4回目：1/6、5回目：2/17、6回目：3/24 以下同様。

注3 ()内は株当たり抽だい本数。

表2 育苗期間別の粗収益（千円/10a）

育苗期間	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	計
60日	368	611	522	609	734	683	3,526
90日	485	759	617	702	745	721	4,029
120日	475	758	607	673	724	740	3,976

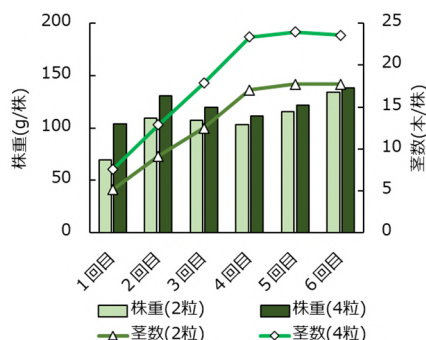


図1 株重・茎数の推移

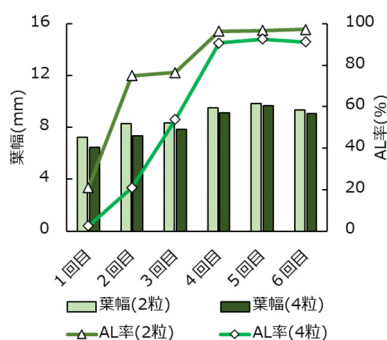


図2 葉幅・AL率の推移

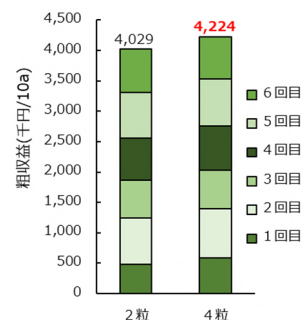


図3 播種粒数別の粗収益